

☆子どもたちの県名認知は、どのようになっているか？

■調査・分析の方法

県名認知度の調査では、各県毎に1から47までの番号を記した白地図の横に県名記入用の枠を設けたワークシートを使用した（アンケートの内容については、巻末に掲載している）。県の名前とその所在地が一致している場合を正答とした。ひらがなによる回答でも正答としている。また、明らかに県名を覚えているとみられ、漢字のみを間違えて覚えている場合（例えば、「群馬」を「郡馬」、「大阪」を「大坂」、「鳥取」を「取鳥」と回答している場合など）も正答として扱った。

県名認知度の分析は、各県のサンプルの中から4年生から6年生の各学年で30人ずつ（1県につき計90人）をランダムに抽出しておこなった。よってこの分析は、各学年1,410人、計4,230人を対象としたものになっている。これは全サンプル12,384人のうちの約34%にあたる。

ただし、回答を得られなかった5県（埼玉・岐阜・滋賀・徳島・佐賀）と、サンプルが集まらなかった、神奈川・岡山の4年生分、北海道・三重・福岡の6年生分については、学年別の全国平均数値等から予測正答数（※参照）を割り出し、その数値を上乗せした上で、分析をおこなっている。

この数値修正をおこなったまでの分析結果と、修正前の分析結果において、大きな順位変動はなかった。

※上記の予測正答数は、「自分の住んでいる県」、「自県の隣接県」、「その他の県」の3つに分けて数値を予測している。

例えば、埼玉であれば、「埼玉」および「埼玉に隣接する県」の正答数は、自県正答率および隣接県正答率の全国平均から計算し、「その他の県」に関しては、それぞれの県の全国平均正答率から計算し、それぞれの正答数を積み上げている。

■子どもたちの県名認知の平均

学年毎の平均県名獲得数は、以下のとおりである。

4年生…13.6県（29%）

5年生…20.0県（42%）

6年生…19.2県（41%）

このように、5年生の時点がもっとも県名を習得している。この調査は、平成14年の1月～3月の間に実施したが、5年生の社会科の学習内容（産業学習など）で、県名が多く使われていることが要因と考えられる。

■県名認知度の高い県の特色

県名認知度1・2位は日本の両端にある北海道と沖縄。他の上位にも青森（3位）、岩手（5位）、秋田（7位）、鹿児島（9位）と日本北端・南端、特に北海道から東北地方にかけて認知している様子が読みとれる（東北は17位までに全ての県が入っている）。

東京（6位）と大阪（10位）が上位に入っているのは、やはり日本を代表する大きな都市であり、情報度が高く、子どもたちにも印象が強いためであると考えられる。

また、新潟（4位）、千葉（8位）、石川（11位）、山口（14位）、滋賀（16位）という県が上位に入っているのは、半島や島など、県の形状に目立つ要因があるためと予測される。

■県名認知度の低い県の特色

一方、認知度の低い県は、関東地方より西側の県に集中している。これは北の方から習得していくことに起因するのであろう。また、認知度の低い順に、福井（47位）、山梨（46位）、島根（45位）と続くことをみると、学習内容で取り上げられることが少ないために、子どもたちがイメージを持ちにくいのではないかと考えられる。

また、山梨をはじめ、岐阜、奈良（ともに40位）、栃木（38位）など、内陸県の認知度も低い。これは、千葉や石川とは逆に、県の形状や位置の特徴がつかみにくいためと考えられる。

■県名正答率の検証

県名認知度の順位ではなく、県毎の正答率に目を向けてみると、北海道（99%）・沖縄（94%）・青森（89%）までの上位3県以下は急激に落ち、4位の新潟で65%となってしまう。

正答率が50%を越える県は11位の石川までであり、残りの36県（47県中の割合でいうと76%強）は2人に1人が回答できていないということになる。

正答率40%以下の県は27県（47県のうちの57%強）、正答率

が3分の1をきる県は13県（47県のうち27%強）となっている。

■学年毎に認知度が大きく変化する県

学年による認知度順位の変動が激しい県がいくつか見られる。順位差が10位以上ある県は、滋賀・広島・岡山・和歌山（以上4県は上昇）・山形・大分・愛媛（以上3県は下降）・高知（下降から上昇）であるが、その理由は、はっきりとは分からぬ。

しかし、各学年の学習内容との関連によって予測できるものもある。たとえば、滋賀は琵琶湖の環境学習、広島は歴史と平和学習などによって、認知度が上昇するのではないかと考えられる。

また、教科書で取り上げる事例地域のかたよりのため、その差異が出てくるとも考えられる。

■学年毎にみる県毎の正答率の推移

4年生の正答率が50%を越えるのは、北海道・沖縄・青森の3県のみである（特に北海道の93%はダントツ）。大半の県が正答率30%を割り込み、ほとんど団子状態になっている。

5年生になると、どの県の正答率も大きな伸びを示し、県名知識の増大が読みとれる。5年生の社会科の学習内容（産業学習）にあわせて、日本全国の様子を地図上から読みとる機会が増えるため、県名認知も自然とひろがっていくものと思われる。

しかし、6年生になると、過半数の県（32県）で5年生よりも正答率が下がってしまう。6年生の社会科の学習内容は歴史が中心となり、県名認知の機会が少なくなることが原因であると考えられる。

5年生の時に、県名を全て暗記したとしても、6年生になり、しばらく地図から遠ざかってしまうと、子どもたちの頭の中からは、県名はどんどん消えていってしまうのだろう。**算数のかけ算九九は、全て覚えた後に、算数の学習内容で繰り返し活用されているため、暗記した内容が定着していく。しかし、県名は、せっかく覚えても継続して使う場が用意されていないのだ。**もったいない話である。歴史学習での地図の活用はもちろんのこと、**教室でも、日常生活の中でも、地図を見たり、使ったりする場を積極的につくって、知識を定着させるための工夫が必要になってくるであろう。**

■自分の住んでいる県の認知

4年生の85%以上は、自分達の住んでいる県の名前・位置

について認知している。4年生の社会科学習の内容に、自分達の住んでいる県を調べる項目があるが、その際に、地図上で、自分達の県の位置をきちんと確認しているため、多くの子どもたちが認知しているものと思われる。

自分の住んでいる県の認知度は、学年を追う毎に上昇していく、6年生では94%弱が認知している。

■地方毎に見る県名認知度

子どもたちの住んでいる地方毎に県名認知度の階級区分地図を作成してみると、興味深い事実がうきぼりになってくる。

日本全国、どこに住んでいる子どもたちも、日本の両端（北海道・東北北部と沖縄・鹿児島）を理解していることがまず読みとれる。そして、自分の住んでいる県を中心として、周りの県については、ある程度押さえられていることも読みとることができ。

そして、当然のことながら、自分の住んでいる県から遠い地方の県名についての認知は薄いということも読みとれる。

子どもたちの住んでいる地方毎に、認知度の低い地方を挙げてみると以下のようになる。

住んでいる地方	認知度の低い地方
北海道・東北地方	近畿・中四国・九州
関東地方	西日本全般
北陸地方	北関東・中四国・九州
東海・甲信地方	南東北・北関東・西日本
近畿地方	南東北・北関東・四国・九州
中国地方	北関東・中部・四国
四国地方	中部・近畿
九州地方	南東北・北関東・中部・近畿

この点を押さえて、学習内容を検討していくことも考えてみる価値があるのではなかろうか。

また、4年生の時点では、自分達の住んでいる県の認知はかなり進んでいるので、自分の県の学習を行う際には、隣り合う県の名前と位置を確実に認知させていくことも有効であると思われる。

☆地図帳の好き嫌いと、子どもたちの県名認知度の関係は？

地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係

総合	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	1,871	15.1%	21.3	45.4%	25.5
地図好き	4,530	36.7%	19.2	40.9%	23.3
どちらでもない	4,659	37.7%	16.7	35.7%	21.0
地図嫌い	975	7.9%	12.8	27.4%	17.0
地図大嫌い	317	2.6%	12.1	25.8%	16.6
	12,352				

社会科の好き嫌いと県名正答数の関係

総合	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	1,505	12.2%	23.2	49.3%	27.1
社会好き	4,140	33.5%	18.9	40.2%	23.1
どちらでもない	4,593	37.2%	16.6	35.4%	20.7
社会嫌い	1,462	11.8%	15.8	33.7%	20.1
社会大嫌い	653	5.3%	13.8	29.4%	18.2
	12,353				

4年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	882	22.1%	16.9	35.9%	20.6
地図好き	1,586	39.7%	14.1	30.0%	17.4
どちらでもない	1,167	29.2%	10.8	23.0%	14.0
地図嫌い	278	7.0%	7.7	16.4%	10.9
地図大嫌い	84	2.1%	6.8	14.4%	11.1
	3,997				

4年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	541	13.5%	18.5	39.2%	22.1
社会好き	1,410	35.3%	13.7	29.2%	17.1
どちらでもない	1,447	36.2%	12.1	25.8%	15.2
社会嫌い	415	10.4%	10.2	21.7%	13.8
社会大嫌い	184	4.6%	8.1	17.3%	12.2
	3,997				

5年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	664	14.6%	26.2	55.8%	30.5
地図好き	1,699	37.3%	22.3	47.4%	26.6
どちらでもない	1,699	37.3%	19.1	40.7%	23.6
地図嫌い	362	7.9%	15.4	32.8%	19.9
地図大嫌い	132	2.9%	14.2	30.1%	18.4
	4,556				

5年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	483	10.6%	26.8	57.0%	30.6
社会好き	1,472	32.3%	22.1	47.0%	26.7
どちらでもない	1,763	38.7%	19.1	40.7%	23.5
社会嫌い	577	12.7%	19.7	42.1%	24.4
社会大嫌い	259	5.7%	17.9	38.1%	21.9
	4,554				

6年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
地図大好き	325	8.6%	23.4	49.8%	28.3
地図好き	1,245	32.8%	21.6	46.1%	26.4
どちらでもない	1,793	47.2%	18.4	39.2%	23.0
地図嫌い	335	8.8%	14.2	30.6%	19.0
地図大嫌い	101	2.7%	13.9	29.6%	18.8
	3,799				

6年	該当者数	完全正答数	正答率	県名回答数	周辺認知度
社会大好き	481	12.7%	24.8	52.9%	29.3
社会好き	1,258	33.1%	20.9	44.7%	25.8
どちらでもない	1,383	36.4%	18.1	38.6%	22.8
社会嫌い	470	12.4%	16.0	34.1%	20.5
社会大嫌い	210	5.5%	13.8	29.4%	19.0
	3,802				

※ 完全正答数とは、県名と位置とが合致した正答の数。

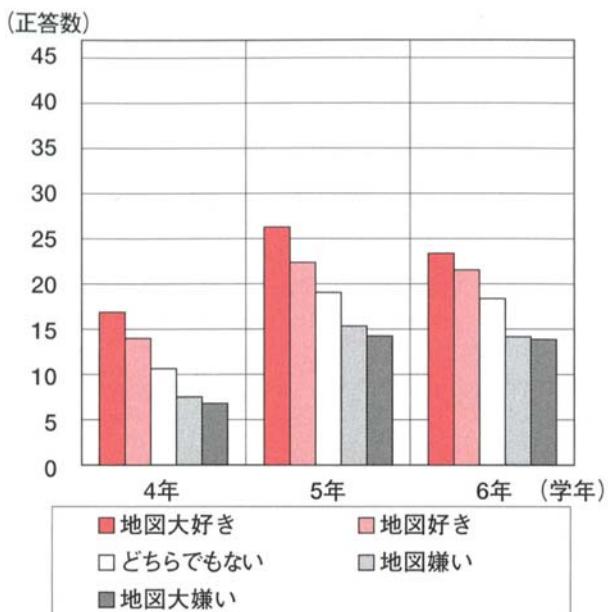
※ 県名回答数とは、完全正答数に、県名のみの正答も加えた回答の数。

※ 周辺認知度とは、自県とその隣接県の認知度。1～5の5段階で評価。1に近づくほど、認知度が高い。

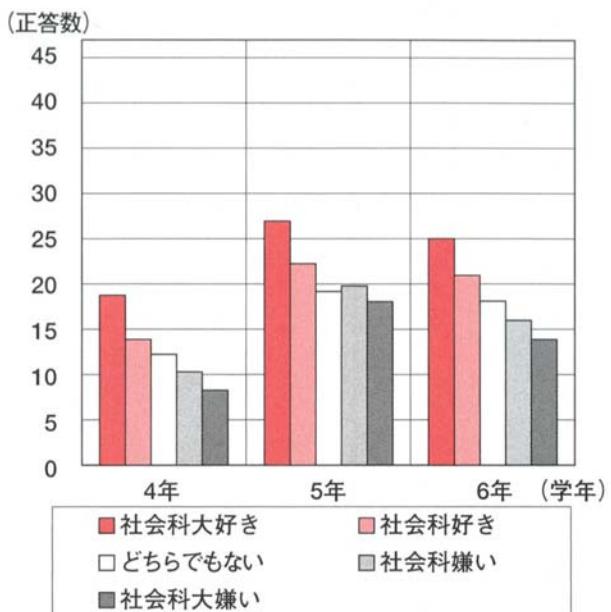
(1:自県および隣接県全てを正答 2:自県を正答、かつ、隣接県のうち2～3県を正答 3:自県を正答、かつ、隣接県のうち1県を正答

4:自県か、隣接県のうち1つのみ正答 5:自県、隣接県とも正答できず)

地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係



社会科の好き嫌いと県名正答数の関係



■ 地図帳への興味と県名認知度の関係

図表「地図帳の好き嫌いと県名正答数の関係」をみると、各学年ともに地図好きの子どもたちのほうが、より県名の認知度が高いということが、はっきりとわかる。特に4年生の「地図大好き」の子どもたちは、同学年の「地図大嫌い」の子どもたちとくらべて、平均県名正答数に倍以上も開きがあることが分かる。また、6年生の「地図大嫌い」の子どもたちの平均県名正答数は、4年生の「地図大好き」の子どもたちのそれよりも低くなるという結果も出た。

また、図表「社会科の好き嫌いと県名正答数の関係」をみても、上記の結果と同様に、社会科が好きなほど、より県名認知度が高いことがわかる。

「完全（県名）正答数」以外にも、「県名正答数」や「周辺認知度」の数字も、地図好き、社会科好きの子どもたちのほうが、より高い数値を示している。

今回の調査で、47県全ての名前とその位置を正解した子どもは、878人いた。このうちの65%以上の子どもたちが、地図帳を「大好き」、または「好き」と答えている。また、40県以上正解した子どもたち（1,762人）のうち、「大好き」、「好き」と答えた子どもたちは、65%近くになる（全サンプル12,353人のうち、地図帳を「大好き」、「好き」と回答した子どもたちの割合は52%弱である）。

アニメキャラクターの名前（例えば、ポケモンなど）を暗記する能力、テレビゲームの裏技を見つけだす能力など、子どもたちは、大人顔負けの能力を発揮する。これらの例を出すまでもなく、子どもたちは、興味を持つことにはどんどん取り組み、そして吸収していく。県名認知度を高めるためにも、まず、興味を持たせることが、一番の近道なのかもしれない。